

速水 淑子 著『トーマス・マンの政治思想』

伊藤 白

共通の価値基準などもはや存在しないかのようなこの現代社会において、いかにして善悪を説くことができるのか。冷戦終結から四半世紀を経て、紛争やテロのニュースを聞かない日はなく、既存の社会秩序の揺らぎに多くの人が不安を感じる現在、これは私たちにとってアクチュアルな問題として問われている。そしてこの問いがやはりアクチュアルであったもう一つの時代、すなわち二つの大戦に世界が翻弄された 20 世紀の前半にこの問いと格闘した一人の作家として、本書はトーマス・マンを取り上げ、その思想的軌跡を追っている。

トーマス・マンの政治的態度をめぐっては、保守主義者から共和国を支持する民主主義者へ、そして反ナチの闘志へと成長を遂げた作家という像と、非政治的な審美家であり続けた保守的芸術家という像の、二つの対照的な理解が存在してきた。この問題に対して著者は、マンを、本来の審美主義的で非政治的な傾向にもかかわらず、あえて時代の要請を引き受け政治について思考し発言した作家として理解し、その政治的思考の努力を評価するという立場をとる。

その歩みは、次の通りに跡付けられる。マンが第一次世界大戦の時期までに自身の基礎的態度としていたのは、イロニー、あるいは諦念のエートスと本書で語られる、あらゆる存在をありのままに肯定する態度であり、これを保持することのできる政治体制としてマンは帝政を支持し、政治と内面的領域の分離を主張していた。しかしながらワイマール共和国が成立し、左右からおびやかされる中、マンはその支持を表明し、政治と内面的領域の分離というそれまでの主張を撤回する一方で、代表作『魔の山』及びその前後の論説において、フランスやロシアとは異なる「ドイツ的な」共和国のあり方を模索するようになる。

だがそれまでマンが前提としてきたあらゆる存在をありのままに肯定する態度

は、ナチスのような現実の恐怖政治の前では無力であった。マンは公的な亡命宣言及びドイツ国籍の剥奪以降、ナチスへの断固とした批判を繰り返すようになり、その際「戦闘的デモクラシー」を主張する。ただしこの「戦闘的デモクラシー」は上からのデモクラシーをその内容とするものであり、人民による統治ではなく、卓越した統治者による独裁を求めるものであった。これは統治者の倫理にのみその正当性を求める脆弱なものであり、ファシズムに代表される恐怖政治に容易に転落しうる。その両義性を描いたのが晩年の代表作『ファウストゥス博士』であった、と著者は論じる。

以下、各章の内容を紹介する。

第1章では、第一次世界大戦期のマンの自省のエッセイ『非政治的人間の考察』（1918）の「市民性」の章を取り上げ、そこでマンが描く市民像が、歴史的事実としての市民とは大きく乖離していたことを確認する。マンの理解における中世都市市民は非政治的で、そこからの逸脱を断念することを前提に、存在するものをありのままに肯定する「諦念」（ルカーチ）のエートスに貫かれた予定調和的なものであった。しかし実際には、中世都市市民はむしろその政治性をアイデンティティとしていたのであり、マンはこの概念を脱政治化—マンハイムの言葉を借りれば「ロマン化」—したのであった。さらに著者はこの市民の諦念のエートスと共通するものを、マンのキー概念である「イロニー」の中に見る。マンは『非政治的人間の考察』の中でイロニーを「価値を度外視して人間を肯定すること」と定義しているが、この意味におけるイロニーは、まさに上述の市民の諦念のエートスの別名に他ならないのである。

第2章では、『非政治的人間の考察』におけるマンの政治とイロニーの統合の試みが分析される。第1章で見た通り、イロニーとは「価値を度外視して人間を肯定すること」であるが、これと対比させられるのが「政治」という概念であり、マンによるところの「排他的なデモクラシー」である。マンは、政治と内面的領域を分離しなければならないと主張する傍ら、「イロニー的政治」を、すなわち、無限の寛容さを持つ政治、芸術家的な政治を模索する。しかしすべてを肯定する政治も、そのような政治を否定する政治に対しては排他的であらざるを得ない。この意味においてマンの「イロニー的政治」は破たんしている、と著者は断罪する。

『非政治的人間の考察』において、政治と内面的領域の分離を主張し、自らの立場を「非政治」に置いたマンであったが、1923年の講演「ドイツ共和国について」では、共和国支持の立場を明らかにし、いわゆる「転向」を表明した。本書第3章はこのマンの「転向」の評価を巡って、マンのこの講演とこの時期に書かれた代表作『魔の山』(1924)を分析する。著者によれば、これまでしばしば、情熱からではなく諦めから共和国を受け入れた「理性の共和主義者」とみなされてきたマンの共和国支持は、決して単なるプラグマティックな態度ではなく、感情的基礎に基づいたものであった。そして著者は、それを可能にするような共和国の理解を、『魔の山』の主人公ハンス・カストルプの見出す西(フランス)と東(ロシア)の間にある「ドイツ的共同体」、すなわち、「人間性」の別名である「有機体への共感」を介して個人の内面性と結びつきうるような共同体に求めている。

第4章は、第3章で見たマンの新しい政治的立場、すなわち内面的領域と統合された政治としての共同体論を支えるもう一つ概念として「教養」を提示し、第5章で展開するマンの教養概念をめぐる議論の前提として、この概念の歴史を13世紀の神秘主義にまでさかのぼって振り返る。本書の文脈で重要なのは、ドイツの精神史において、教養の概念が政治性・社会性を失っていった過程である。18世紀末、人文主義の影響のもとに古典語の素養が求められるようになると、教養概念から政治的社会的教育という要素が失われていった。さらには1848年の革命の挫折以降、市民層が保守化し、教養はもっぱら非政治的な概念へと収斂していくことになった。こうした状況下、教養小説の歴史を振り返ったディルタイやルカーチは、教養が個人の内面的領域と社会・政治的領域を繋ぐ可能性について、悲観的な結論を出すに至った。

こうした教養概念の非政治性を、マンも決して認識していなかったわけではない。むしろ、後に『ドイツとドイツ人』(1945)などの講演において、ドイツ人の非政治性がナチスを生み出したと断罪するマンは、教養概念のこうした状況を誰よりも自覚していたと言えよう。しかしマンは、その自覚にもかかわらず、あるいはその自覚ゆえにこそ、古典語の習得に象徴される、実生活から乖離した教養とは異なる「ゲーテ的な」教養概念、すなわち「真にドイツ的な」人文主義をドイツの伝統の中に見出そうとする。そしてこうした「ドイツ的」教養によって個人的内面性と社会が結び付けられた結果生まれるのは、旧来の非政治的ドイツ

市民層でもなく、西欧型のブルジョワ資本主義でも、ファシズムでもボルシェヴィズムでもなく、マン独自の定義によるところの、あくまでも社会に関心を寄せるという道徳的要請としての「社会主義」であった。これが第5章の内容となる。

第6章では、著者は、第3章の「有機体への共感」、第5章の教養及び人文主義に続き、1920年代初頭の反理性主義の潮流に対抗してワイマール共和国を支持するための第3の戦略として、マンが「物語る」ことの機能に着目していたことを指摘する。マンは、理性で捉えきれない領域の存在を認める非合理主義一般を、そうした存在を認識する理性の方に価値を置く「進歩としての反動」と、理性を否定する「反理性主義」に分類し、後者を批判する一方、前者の人間像を「人間が従うべき規範」、「人間性の本質」、あるいは「真理」として提示した。こうした、夢や陶酔といった非合理性の世界で、あるいは形而上的次元でのみ出会うことのできる「真理」は、しかしながら日常の世界では忘れられているものであり—それを著者はハンス・カストルプが「雪」の節の夢を忘れてしまう理由と解釈する—それを「物語る」ことで再現前化すること、そしてそれを共和国の理念として繰り返し示すことが必要であるとマンは考えていたのである。なお本章では、こうしたマンの思想の位置が、ヴェーバー、マンハイム、ベンヤミン、カーラーら同時代の思想家との比較によって示されている。

第7章では、ナチス政権成立後のマンの政治思想の変化とその特徴を『ヨセフとその兄弟たち』（1933～43）に即して追う。第3章から第6章までで見た3つの理論によるマンの共和国支持は、あらゆる存在をあるがままに肯定するイロニー、あるいは諦念のエートスを前提にするものであり、ヒトラー政権に対して何ら対抗することのできない政治的脆弱性を有していた。1933年の亡命後もドイツとのつながりをなかなか絶とうとしなかったマンも、ついに1936年に公式の亡命宣言を出し、ドイツ国籍を剥奪されると、それまでの政治的態度を捨ててナチズムに対して断固とした批判を繰り返すようになる。しかしながらここでマンが主張した「戦闘的デモクラシー」は、人民の主権による政治体制としてのデモクラシーでは決してなく、あくまでも卓越した統治者による独裁であり、「上からのデモクラシー」であった。

最終章は、このマンの上からのデモクラシーの、音楽という芸術を通しての表現を『ファウストゥス博士』（1947）の音楽理論の中に読み解く。主人公アード

リアン・レーヴァーキューンの作曲する「デューラーの木版画による黙示録」は、調性という近代の秩序を失った野蛮を表現したものであった。それに対し、シェーンベルクの12音技法をモデルにした「厳格楽法」という作曲技法を用いて作曲された「ファウストゥス博士の嘆き」は、一人の天才によって新たな秩序が形成されるという点において、上からのデモクラシーの比喩となる。その一方で、この独裁的なデモクラシーが、主人公の運命とともにドイツの政治に重ねられるとき、それはファシズムの特徴としても機能した。ナチス・ドイツのアレゴリーとしての主人公に救済が与えられるとすれば、それは一つには12音技法が上からのデモクラシーの芸術的表現である点に求められよう。しかし、そのあまりにも楽観的な救済の可能性は、マンにこの作品における音楽理論を助言したアドルノによって修正される。アドルノにとって12音技法は、啓蒙と文明の最終段階、理性による抑圧的システムの究極の形であることによってファシズムと同じ構造を持つものであり、したがってそこに希望があるとすれば、それは抑圧的なシステムの存在を聞くものに認識させ、そこからの脱却を目指す実践と行動へ誘う力を持つ点にのみ求められた。マンが『ファウストゥス博士』に作品の「外」に予感される希望を描いたのは、こうしたアドルノとの共同作業の結果であった。

本書の最大の特徴は、著者が文学ではなく政治思想史の専門家であることにあろう。トーマス・マン文学についての深い造詣の一方で、著者は政治思想史の幅広い知識を存分に披露し、マンの思想を同時代の他の思想家ールカーチ、ヴェーバー、マンハイム、ベンヤミン、カーラー、アドルノ等一と比較し相対化する。これは、文学のみを専門とするトーマス・マン研究者には容易に成し得ないものであり、教えられるところが多い。実際のところ本書は、「トーマス・マンの政治性」という従来から幾度となく問われてきたテーマを取りあげていることからわかるとおり、全く新しいトーマス・マン像を提示するというよりは、これまでにトーマス・マン研究の歴史の中で争われてきたいくつかの決定的な問題について、マンの思想を時代の中に位置づけることによって再検証し、より精緻な理解を示すという方法をとっている。その分いわゆる「派手さ」はないが、きわめて真摯な、高度に専門的な研究書となっていると言えよう。

逆にトーマス・マンの専門家ではない読者にとっては、特に本書の中核を成す、

1920年代のマンの政治思想を追うのは必ずしも容易ではない可能性がある。それは一つには、しばしばマンの用語が、「有機体への共感」などのように複雑な内容を持つマン独自のものであったり、あるいは「デモクラシー」や「社会主義」のように、その名が示す一般的な概念からかけ離れたものであったりするからのみならず、実際にマンの思想には曖昧な部分があり、マンの文章の中に、必ずしも実体のないものを実体があるかのように語っているケースが少なからずあるためである。中でも特にマンが「ドイツ的」という表現を用いる際には、あたかも「ドイツ的な本質」というものがあるかのような本質主義的発想がしばしば認められることには、注意が必要だろう。

そしてもう一つにはそれは、著者自身がマンの政治思想のキーワードを用いる際に、あくまでもマンが意図したという意味での鍵括弧つきの概念として用いているのか、それとも額面通りに実体のあるものとして用いているのかが、必ずしも明瞭でないためである。たとえば、著者は「中間にあるドイツ」と題された第3章第5節の冒頭で、「これまでにみたような小説と論説の間の理念的布置の類似から、東西の間にドイツ的な政治を見つけるという課題が、ハンス・カストルブに託されているのではないかと推測が導かれよう」と述べ、この「ドイツ的」な政治が『魔の山』の中でどのように表現されているかを詳説する。著者が「ドイツ的」という表現を引用符をつけることなく用い、なおかつあまりにも丁寧なマンの「ドイツ的政治」の意味するところを明らかにしようとし、しかもマンの概念の実体のなさを批判する決定的な一言が欠けているために、著者のマンへの批判的距離は不明瞭なものとなってしまっている。著者がマンの議論の怪しさに自覚的でないはずはないが、その表現に不徹底がないとは言えないことには、読者は注意して読む必要があるだろう。

さらに言えば、上の引用箇所において「小説と論説の間の理念的布置の類似」が、『魔の山』の政治論をマン自身のものとみなしてよい理由であるかのような書き方となってしまっている点も、少なくともトーマス・マンという作家を問題にするかぎり、必ずしも妥当ではないだろう。マンは、小説をあえて誤読させるような誘導を、論説や、それどころか日記においてすら平気でやっける作家である。ただし、これはあくまでも（文学研究ではなく）政治思想研究としてマンの思想を解き明かすという趣旨ゆえの本書の限界と言えるのかもしれない、こうした

欠点を補って有り余る情報の質と量が本書にあることは繰り返し強調しておきたい。

こうした、必ずしも平易ではない高度に専門的な内容にもかかわらず、そして著者の感情を抑えた筆致にもかかわらず、本書の読後感はさわやかである。それはまさに、トーマス・マンという作家の時代との格闘を描いた本書が、著者による現代という時代との格闘の書であり、厳しい戦いを戦い切った作家の姿の中に著者自身の姿を重ねることができるからかもしれない。この仕事の精緻さと誠実さを、高く評価したい。

(創文社、2015 年)

(いとう・ましろ 学習院大学文学部ドイツ語圏文化学科 准教授)